

「おおいしどうたくしゅつどのおち 大石銅鐸出土之地」記念碑

一八六八年(慶應四年)二月十六日、ここから東方向百メートルの地点、井向村字島田で黒川藤右エ門(石塚)・黒川松右エ門(石塚)・水島嘉エ門(井向)の三名が畔(くろ)とよばれる小高い丘(畑として利用されていた)を崩して、付近の水田の嵩上げ作業中(このあたり一帯は内陸くぼ地と呼ばれ、土地が低く毎年水害に見舞われたため、土地を高くする必要があった)、土中に大小二個の銅鐸が埋まっているのを発見した。土地の所有者である岡部直富(直影の父)に届けた。直富は大牧の絵師に写生させほぼ完全な形の小の方を当時井向村の領主であった三河西尾藩主に献上し、今は名古屋市在住の個人が所蔵している。一方、やや破損している大の方は岡部家に保存されていたが、今は兵庫県西宮市の財団法人辰馬考古資料館所蔵となっている。

銅鐸は今から約二千五百年前の弥生時代、祭具として使われていた。豊作等を祝うお祭りの際、木に吊り下げて鳴らしたり飾ったりして使われていたと考えられる。

なお、記念碑の裏面の説明には「元明治大学考古学陳列館長、故杉原荘介教授により同館所蔵の明大一号銅鐸も発掘されたことが確認された」という記述がある。大石銅鐸三個説を採っている。これに対し、毛利権一氏(大牧)は『堤防―暴れ川、九頭竜川を制した男たち』の著書の中で、これを否定している。明治大学考古学陳列館が所蔵している明大一号銅鐸は、その木箱に「越前大石村」と書かれていることから、春江町役場新庁舎落成を記念して銅鐸を展示するため明治大学から借用したとき同大学の関係者が、春江町史編纂者であった斎藤与次兵衛氏宅を訪れて、聞いた話をもとになっているという。春江町史編纂の始まった頃(昭和三十六年)、銅鐸について井向の古老から話を聞いたとき、「もう一個出たという話を聞いたことがある」と語ったのを明大一号と結びつけたものと思われる。この古老は、昭和初期京福電鉄三国芦原線敷設のため、三国町の山すそを削る工事中に発見された銅鐸のことと混同したのではないかと毛利氏は推測している。岡部家に届けられた二個の銅鐸は実物を借りることができず、写真提供だけだったが、明大一号銅鐸は二つにくらべて破損も少なく錆も緑青一色なのに、二個はともに腐食による破損が目立ち、見るからに古色蒼然としており、三個が同じ場所から出土したとは考えられない。ちなみにこの明大一号については、考古学会では井向出土と認知していないようであると述べている。

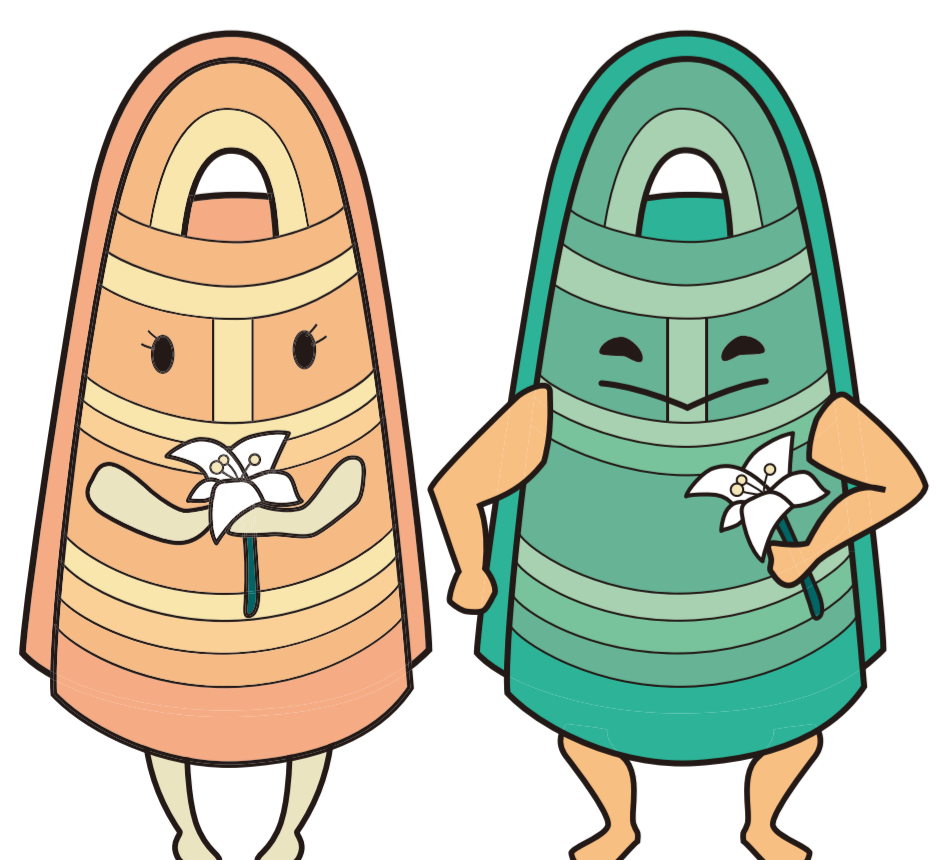
昭和四十一年から始まった県営土地改良工事によって生まれたこの場所(大牧地籍)に、記念碑が昭和五十九年四月春江町により建立された。



公益財団法人 辰馬考古資料館より

大石地区まちづくり協議会

令和五(二〇二三)年 三月製作



大石まち協キャラクター
どうたくTWINs
たっくん & ゆりちゃん